

韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する 比較対照研究*

- 依頼行動における依頼主の意識に注目して -

姜錫祐**

< 要 旨 >

韓国人과 일본인의 커뮤니케이션 행동에 관한 비교대조연구

- 의뢰행동에 보이는 의뢰자의 의식을 중심으로 -

본 연구는 의뢰내용과 의뢰상대와의 친소관계에 주목하여 의뢰행동에 보이는 의뢰자의 의식에 대해 이문화간 커뮤니케이션의 관점에서 한일양국에 보이는 특징에 대해 살펴본 것이다. 분석결과를 정리하면 다음과 같다.

(1) 친한 의뢰상대의 경우: 볼펜장면과 디지털카메라장면에서는 의뢰상대별로 약간의 차이가 보이지만 친한 선생을 제외하고 심리적 부담도와 의뢰의 실행여부에 대한 양국간의 차이는 그다지 크지 않았다. 동전장면에서는 친한 선생을 제외한 모든 상대에게 부탁하기 쉽게 생각하는 경향이 일본보다 한국이 훨씬 강하며, 실제의 행동도 심리적 부담도와 거의 비례하는 경향이 있는 것으로 밝혀졌다.

(2) 친하지 않은 의뢰상대의 경우: 볼펜장면, 동전장면, 디지털카메라장면의 모든 설정장면에서 한국이 일본보다 심리적 부담도와 의뢰의 실행율이 모두 높게 나타났다. 특히 동전장면에 보이는 양국간의 차이가 현저히 큰 것으로 나타나 실제의 접촉장면에서 오해가 생기고 문제의 원인이 될 것으로 보인다.

본 연구에서 밝힌 위와 같은 차이는 의뢰내용 그 자체에 대한 인식과 의뢰상대에 대한 한일양국간의 인식의 차이에 기인한 것으로 보이며, 이러한 인식의 차이를 밝히는 것은 향후 양 국민의 원활한 커뮤니케이션을 위해 매우 중요할 것이다.

主題語：依頼行動、依頼相手、親疎關係、心理的負擔度、依頼の実行率

1.はじめに

世界化・国際化に伴い、文化背景の異なる人々がコミュニケーションする場面はいまや珍しいことではなくなってきた。異なる文化環境で生まれ育ち、言葉や習慣、考え方

* "This work was supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government (MOEHRD)(KRF-2006-013-A00176)"

** カトリック大学校 副教授、日語日本文化専攻

などが違う人々同士の接触が頻繁になればなるほど、そこにはほぼ必ずと言っていいほどコミュニケーション上の問題が生じてくる。そこで本稿では、われわれが日常生活の中で頻繁に行う対人コミュニケーションと関係する数多くの行為の中で、人に何かを頼んだり頼まれたりするといった依頼行動に注目したいと思う。

依頼という行為は、自分のためにあることを行うよう相手に頼む行為であり、そのため、どうしても相手には迷惑や損害を与えがちな行為といえる。しかし、同じ頼みごとでも何を、誰に頼むかによっては迷惑が迷惑でなくなったりすることもあり、その受け止め方は文化によってかなり違うことが予想される。実際に、韓国人の友人を持つ日本人や韓国に滞在している日本人からは「韓国人の頼み方は突然で強引なところがある」「会ったばかりなのにいろいろと頼んでくる」「友達だからといって無理なお願いを平気でする」などという話を耳にすることがある。逆に、日本に留学経験がある韓国人や日本人の友人を持つ韓国人からは、日本人は「はっきり言わないので頼んでいるのか頼んでいないのかわかりにくい」「単純でつまらないことを必死にお願いする」「友達なのに、頼りにされていない気がする」という声を聞くことがある。こうした互いに対する一方的な印象は、韓国語と日本語における依頼の働きかけ方や表現方法の違いから生じることもあるが、日韓での依頼に対する考え方が根本的に異なっていることが原因で起こる場合も多いと予測される。このような両国の考え方の違いが相手に対し不信感や不安感を募らせる危険性もあるため、互いの信頼関係を損ねかねない問題として深刻に受け止める必要がある。

以上のようなことから、本稿では日韓の依頼行動における依頼主の意識に注目して、両国の特徴を検討していきたい。

2. 先行研究の検討と本研究の位置づけ

依頼の表現行動は、相手との人間関係（例えば親疎、上下など）や依頼内容の相手への負担度、場面・状況などによって異なるものであり、話し手は依頼の目的を達成するために数々の表現形式のうち、それにふさわしいどれかを選んで依頼を行うものとみられる。当然ながら、依頼行動には言語形式だけではなく非言語的な手段も用いられる。こうした依頼展開の流れや構造、表現の使い分けと関連した研究としては、岡本(1988)、村上(1991)、川成(1993)、柏崎(1993)、蒲谷ほか(1993)などが挙げられる。岡本(1988)は、日本語の依頼の定型的表現や含意表現など様々な表現の使い分けや表現のパリエーションを規定する諸要因について述べている。村上(1991)は、外国人日本語学習者の談話資料と日本人の談話進行に関する調査からフローチャートを作成し、要求場面で話を進めていく上で前提となる気持ちの流れを図式化している。また、川成(1993)は

女性語の観点から、柏崎(1993)と蒲谷ほか(1993)では、日本語教育と待遇表現教育の観点から依頼表現や依頼の構造などについての詳しい分析が施されている。

また、このような研究に加え、日本語と日本語以外の言語、例えば韓国語、中国語、英語、ドイツ語、フランス語との対照研究³⁾も比較的活発に行われ、依頼行動をめぐる各国の状況や研究の視点など、対照研究を進める上で有用な知見が多く示されている。特に、韓国と日本を対象とした依頼に関する対照研究には、生越(1995)、河村(1999)、牟恩英(2001)、嚴廷美(1997、1999、2001、2004)、柳慧政(2001,2004)、盧姪鉉(2005)、尾崎(2005)などが挙げられる。

まず、依頼の表現そのものに注目した研究をみると、生越(1995)は、待遇レベルによって異なるさまざまな「待遇表現」の形式、そして依頼表現の文と勧誘表現の文の違いや特定の副詞と共に起る依頼表現など、多角的な観点から両国の依頼表現の共通点や相違点について述べている。また、河村(1999)は、韓国映画と日本語字幕、日本の漫画と韓国語翻訳などを比較した資料から、日韓の依頼に関する表現を文型別に取り上げ、両国の表現にみられる「ずれ」について詳細に分析している。牟恩英(2001)は作例を用い、特に依頼する際の間接表現について「日本語では直接的な表現がしづらいため、持って回った、控えめな言い方をするとされているが、韓国語では同じ空間（物理的な意味においても、心理的な意味においても）で共同の場を共有したいという、押しの強い言い方になっている」とし、両国には間接的という意味合いにも解釈の違いがあると指摘している。

次に、談話レベルでのストラテジー研究についてみてみると、嚴廷美(1997、1999、2001、2004)の一連の研究では、依頼内容の異なる5つの場面を設定し、それほど親しくない同学年の人に対しどのような表現を使って依頼するかを談話完成テストで調査し、日本語と韓国語の依頼の構造やストラテジー、言いわけ表現などを観察している。また、柳慧政(2001,2004)は、日本語母語話者と韓国人日本語学習者を対象に依頼談話の調査を行い、ポライトネスストラテジーの使用状況や依頼場面で目的を達成するために行う情報提供について検討している。

以上の依頼に関する代表的な先行研究を検討してみると、依頼相手や依頼内容にかかわらず、当然話し手が依頼するということを想定した場面での依頼表現や言語的なストラテジーを取り上げたものがほとんどであることがわかる。もちろん、ある一定の依頼場面でどのような表現やストラテジーが使われるかということは大変重要な問題である。しかし、実際のコミュニケーションでは、依頼の内容が同じでも依頼相手によって依頼主の心理的負担度も異なるであろうし、また実際に依頼をするか否かのような問題

0) 英語との対照研究には、藤島(1993)、中崎(1998)があり、中国語とは、林(1982)、木村(1987)、鮫島(1998)、謝(2001)が取り上げられる。またドイツ語とは、林(2000)、田中(2004)、フランス語とは、猪崎(2000)がある。

は表現やストラテジーと同じく、丁寧さや対人配慮の側面から考慮すべき大事な事項であろう。にもかかわらず、こうした依頼主の心的負担や依頼実行可否に関する意識などの問題は、これまであまり扱われることがなかったように思われる。

最近の研究で注目されるのは、非言語的な行動や対人的距離意識などの文化的側面を、依頼をする際に用いられるコミュニケーション手段として考慮し、言語行動様式に焦点を当てた盧姪鉉(2005)と尾崎(2005)である。まず、盧姪鉉(2005)は依頼相手に親疎、上下の異なる6名を設定し、相手の所持品を使用する場面における「頼みやすさ」と依頼をする際の切り出し方との関わりについて日韓の特徴を調査している。また、尾崎(2005)では、依頼内容を軽い依頼(手紙出し)と重い依頼(本買い)に分け、それぞれの場面において依頼相手(家族、友達、知り合いになったばかりの相手の3名)に頼めそうかどうかを調査し、自分と他人の距離感やテリトリーなどの対人的距離意識に関する日韓の違いについて考察している。

このように依頼行動全体を解明していくためには、表面に現れる言語表現やストラテジーだけでなく、そうした表現行動の根底にある依頼主の意識や非言語行動の問題についても明らかにしておく必要があると思われる。このような価値観とも深い関わりを持つ行動主体の意識に関する問題の究明は、特に異文化との比較を行う対照研究において、言語・非言語的な表現やストラテジーに関する研究の成果をバックアップするとともに、言語行動の研究領域の更なる発展にも役立つものとして位置づけられよう。しかし、このような視点からの研究はまだ少なく、両国の依頼行動の実態について議論するには、十分であるとは言えない。

そこで、本稿では依頼を行う際の依頼主の意識に注目し、依頼主がどのような相手にどの程度心理的に負担を感じるのか、そうした負担は依頼内容によってどう異なるか、そして実際にその依頼行動を実行するか否かを中心に、異文化間コミュニケーションの観点から日韓両国における依頼行動の特徴について検討していきたい。

3. 調査の概要

3.1 調査実施地域および調査対象

調査は韓国では2006年4月～6月、日本では同年5月～7月にかけて、両国の首都を含む主要4都市の大学生を中心に行った²⁾。具体的な調査実施地域および人数は表1のとおりであ

表1 調査地域および人数 単位：人

	地域	男	女	計
韓国	ソウル	77	90	167
	大田	73	68	141
	釜山	63	79	142
	光州	61	65	126
	計	274	302	576

る3)。

3.2 調査の方法と内容

日本	東京	82	100	182
	大阪	68	67	135
	福岡	59	114	173
	札幌	82	91	173
	計	291	372	663

今回の調査は依頼をめぐる日韓の意識の差を量的に把握するためにア

ンケート形式で行った。依頼場面としては、「ボールペンを借りる場面（以下、ペン場面）」「ジュースを買うために小銭を借りる場面（以下、小銭場面）」「発表準備のためにデジタルカメラを借りる場面（以下、デジカメ場面）」の3つの場面を設定した。詳しくは以下の通りである。

- ペン場面** : あなたが大切なことをメモしている最中に、急にボールペンが出なくなりました。その時、ちょうど隣に①から⑨の人がいたとしたら、どうしますか。
- 小銭場面⁴⁾** : あなたは自動販売機で120円のジュースを買おうと思いました。しかし、財布の中に5千円札と小銭が110円しかなく、10円玉が一枚足りないことに気がつきました。近くに5千円札を両替できるところもありません。その時ちょうど①から⑨の人を見かけたとしたら、どうしますか。
- デジカメ場面** : 来週、授業で発表することになり、その資料の準備のためにデジタルカメラがどうしても必要です。あなたはデジタルカメラを持っていないので、3日ほど誰かにカメラを借りて使いたいと思っています。ちょうど①から⑨の人がデジタルカメラを持っているとしたら、どうしますか。

以上の3つの依頼場面は、場面の自然さを考慮し、大学生がふだん大学生活を送る中で遭遇しやすい場面になるように設定した。また、依頼内容については3つの場面のうち、「ペン場面」は相手にかかる負担が最も小さい依頼であり、「小銭場面」はペンのようにその場ですぐに返すことができるものではなく、「ペン場面」に比べ、比較的負担の大きい依頼であるといえる。「デジカメ場面」は「小銭場面」と比べて一概に負担が大きいとは言えないところもあるが⁵⁾、金銭的に高価な物だけにやや負担の大きい依頼と思われる。

上記の3つの依頼場面における依頼相手には、大学生が接することの多い親疎・上下の異なる9名の人物を想定した。

- 2) 大学生を中心に調査を行ったが、わずかながら大学院生も含まれている。
- 3) 調査地域のうち、ソウルは仁川、富川などの地域を、また東京は埼玉、神奈川などの周辺地域も含めている。
- 4) 小銭場面では、韓国と日本での物価などを考慮し、韓国の調査ではできる限り現実に近い場面になるよう、500ウォンのジュースを買うときに50ウォンを借りるという設定で行った。
- 5) これにはモノの価値に加え、依頼内容の妥当性も関連がありそうであるが、この点は本稿では取り上げない。

<依頼相手>

- ① 個人的なことまで相談したことのある親しい先生【親・先生】
- ② 個人的にあまり話さないが、いま授業を取っている先生【疎・先生】
- ③ 同じ学科の親しい先輩【親・先輩】
- ④ 顔だけ知っている程度の先輩【疎・先輩】
- ⑤ 学科で一番親しい友達【親・友達】
- ⑥ 顔だけ知っている程度の同級生【疎・友達】
- ⑦ 同じ学科の親しい後輩【親・後輩】
- ⑧ 顔だけ知っている程度の後輩【疎・後輩】
- ⑨ 同い年ぐらいの見知らぬ学生【初・学生】

調査では、インフォーマントがそれぞれの依頼場面における依頼主となり、上記の①から⑨の相手に依頼をする際に感じるインフォーマント自身の気持ちを「頼みにくい」「やや頼みにくい」「やや頼みやすい」「頼みやすい」の4段階で答えるという形式で行った。また、その気持ちとは別に、インフォーマント自身が実際にこのような状況に置かれた場合、どのように行動するかについて「頼む」「頼まない」のどちらかを選択してもらった。

4. 分析結果と考察

以下では、調査結果をもとに集計表を作成し、3つの依頼場面で依頼主が各々の依頼相手に対してどの程度の心理的負担を感じるかについて、親疎関係という人間関係の軸からみていく。また、このような依頼行動を実際に実行するかどうかについても同様に分析し、これらの結果を韓国と日本で比較検討していきたい。なお、表には調査した負担度を4段階（頼みにくい/やや頼みにくい/やや頼みやすい/頼みやすい）で集計した結果をそのまま示すが、分析の観点を明確にするために、大きく2段階（頼みにくい/頼みやすい）に分けて算出した結果も示し、分析を進めていく。

4.1 場面別にみる依頼相手に対する心理的負担度の日韓比較—親疎関係に注目して—

(1) ボールペンを借りる場面

ボールペンを借りる場面は、われわれの日常生活で誰でも一度ぐらいは経験しているような行為であり、相手にかかる負担の軽微な依頼といえる。こうした軽い依頼ではあるが、韓国人と日本人はどのような人物にどれくらい負担を感じるのか。また、そこに日韓の差はあるのかについて見てみよう。表2-1は、親しい相手に対してボールペンを借りる場合の負担度について、その結果を示したものである。

表2-1 親しい相手に対してペンを借りる場合の負担度 単位：% (人数)

依頼相手 負担度	親・先生		親・先輩		親・友達		親・後輩	
	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
頼みにくい	5.2	2.4	0.5	1.5	0.0	0.3	0.5	1.8
やや頼みにくい	16.2	6.0	3.7	6.2	0.3	0.5	2.3	5.4
小計	21.4	8.4	4.2	7.7	0.3	0.8	2.8	7.2
やや頼みやすい	32.9	24.1	17.0	24.0	2.3	1.5	16.9	13.4
頼みやすい	45.7	67.4	78.8	68.3	97.4	97.7	80.3	79.3
小計	78.6	91.5	95.8	92.3	99.7	99.2	97.2	92.7
合計	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)

親しい相手として設定された人物は、「先生」「先輩」「友達」「後輩」の4人である。これらの人物に対する心理的負担度をみると、両国とも全体的にあまり負担は感じてないようであり、日韓による差はほとんど見られなかった。しかし、相手が「先生」に限って、両国の間に違いが見られる。つまり、日本では相手が「先生」であっても頼みやすいと思う率は91.5%で「先輩」「後輩」に対する比率と変わらないのに対して、韓国では78.6%にとどまっている。比較的軽い依頼であるボールペンを借りる場合であっても、また、相手が親しい関係でも、その相手が「先生」であれば、日本人に比べて韓国人のほうが負担を感じる事がわかる。

上記の結果の全体を見渡すために、親しい相手を頼みやすいと感じる順（頼みやすい+やや頼みやすいの値が高い順）に並べると、以下ようになる。ここでのK(親)は韓国の親しい相手、J(親)は日本の親しい相手のことを示す。

K(親)：「友達(99.7)」 > 「後輩(97.2)」 > 「先輩(95.8)」 ≫ 「先生(78.6)」

J(親)：「友達(99.2)」 > 「後輩(92.7)」 ≧ 「先輩(92.3)」 ≧ 「先生(91.5)」

表2-2 親しくない相手に対してペンを借りる場合の負担度 単位：% (人数)

依頼相手 負担度	疎・先生		疎・先輩		疎・友達		疎・後輩		初・学生	
	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
頼みにくい	25.4	31.2	13.1	38.5	2.6	10.1	5.2	18.8	23.1	55.2
やや頼みにくい	44.3	46.0	45.1	45.2	26.8	50.1	31.8	48.8	49.6	32.6
小計	69.7	77.2	58.2	83.7	29.4	60.2	37.0	67.6	72.7	87.8

やや頼みやすい	19.5	17.5	28.9	13.6	44.2	30.6	38.8	24.3	17.2	8.7
頼みやすい	10.8	5.3	12.9	2.7	26.4	9.2	24.2	8.9	10.1	3.5
小計	30.3	22.8	41.8	16.3	70.6	39.8	63.0	33.2	27.3	12.2
合計	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)

次は、親しくない相手にボールペンを借りる場合にどれくらい負担を感じるかについてみよう。ここで取り上げる親しくない相手は、親しい場合と同じく「先生」「先輩」「友達」「後輩」の4人に、同い年ぐらいの見知らぬ学生（以下、「初・学生」）を加えた5人の人物である。親しくない相手には頼む内容が何であろうとも、頼みにくくなるのが普通であろうが、今回のように、ボールペンを借りるといった軽い依頼の場合はどうか。表2-2はその結果を表したものである。

全体的に概観すると、両国共にいくら軽い依頼とはいえ、相手が親しくない場合はやはり親しい人に頼むより負担を感じる事がわかる。さらに興味深い点は、親しい相手に頼むときには「先生」を除いて、ほとんど差が見られなかったが、親しくない相手に頼むときには、両国間の差がかなり大きいということである。この差を明確に示すために、頼みやすい相手順に並べてみると、以下のようになる。

K(疎): 「友達(70.6)」 > 「後輩(63.0)」 ≧ 「先輩(41.8)」 > 「先生(30.3)」 > 「初・学生(27.3)」

J(疎): 「友達(39.8)」 > 「後輩(33.2)」 > 「先生(22.8)」 > 「先輩(16.3)」 > 「初・学生(12.2)」

まず、相手が「疎・友達」に注目してみると、日本では、たとえボールペンを借りる軽い依頼であっても、頼みやすいと思っている割合は39.8%にすぎず、韓国の70.6%に比べてかなり低い比率といえる。「疎・後輩」の場合も「疎・友達」よりやや比率は低い、類似した傾向を見せている。また、「疎・先輩」をみると、韓国の場合は頼みやすいと思う率が41.8%で友達や後輩の結果にくらべかなり低くなる。また、日本においても相手が「疎・先輩」の場合は16.3%とかなり低く、韓国との差も大きい。「初・学生」の場合は日韓ともに最も低く、頼みやすいと思う比率は韓国が27.3%、日本が12.2%である。最後に「疎・先生」の結果を見てみると、韓国では30.3%、日本では22.8%の比率で頼みやすい相手だと認識されていることがわかる。「疎・先生」の場合、数値上の結果は一見あまり差がないようにみえるが、日本では「疎・先生」のほうが「疎・先輩」よりも頼みやすい相手として思われている点、そして、他の依頼相手が韓国と日本で2倍程度の差がついている点などを考えると、これを単純に差があまり見られないと解釈しがたいものがある。つまり、相対的な比較ではあるが、ここでは日本人

の学生が韓国人よりも先生を身近に感じ、頼みやすい相手として意識していることが確認できるといえ、日韓両国において先生と学生との対人的距離の違いを客観的な数値として確認できたことには、大きな意義があろう。

ところで、実際の場面では、他人への依頼とはいえ、親しい関係にある人には何も言わずに相手のボールペンを使うといった、いわゆる無言行動を行うことがある。これに関連して盧姓鉉(2005)は、相手のボールペンを使用する場面での切り出し方⁶⁾として、頼みやすいと認識している相手については、日本では「非言語+言語」のタイプのほうが、韓国では「非言語」のタイプの使用率が高いと報告している点は注目される。また、韓国は日本よりも目的達成指向性を行動に出す度合いが強く、日本は韓国よりも対人配慮指向性が強いことを明らかにし、日韓共に頼みにくい相手に対しては目的達成指向性の度合いが弱くなり、対人配慮指向性が強くなるとの興味深い見解を示している。

(2) 小銭を借りる場面

ジュースを買うために小銭を借りる場面において日韓両国の差はあるのか。まず、依頼相手が親しい場合の結果について見てみよう。表3-1はその結果をまとめたものであ

表3-1 親しい相手に対して小銭を借りる場合の負担度 単位：% (人数)

依頼相手 負担度	親・先生		親・先輩		親・友達		親・後輩	
	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
頼みにくい	14.9	22.8	3.1	11.3	1.6	3.0	3.5	10.4
やや頼みにくい	25.7	23.1	6.9	17.0	1.0	3.0	7.8	14.4
小計	40.6	45.9	10.0	28.3	2.6	6.0	11.3	24.8
やや頼みやすい	27.8	21.3	19.1	28.7	4.0	9.4	18.4	19.9
頼みやすい	31.6	32.9	70.8	43.0	93.4	84.6	70.3	55.3
小計	59.4	54.2	89.9	71.7	97.4	94.0	88.7	75.2
合計	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)

る。

全体的な傾向をみると、その差は大きくないが、どの相手においても、韓国人のほう

6) 盧姓鉉(2005)は、言語行動の切り出し方を次の3つのタイプに分類している。タイプ1(非言語)は、非言語によって言語行動を開始するタイプ。タイプ2(非言語+言語)は、言語行動遂行の目的そのものに関わる一連の行動に移りながら言語表現を発することによって、言語行動を開始するタイプ。タイプ3(言語)は、言語行動遂行の目的そのものに関わる一連の行動に移る前に、言語表現を発することによって、言語行動を開始するタイプ。

が日本人より頼みやすいと思う比率がやや高いことが見て取れる。これを同じく親しい相手に対する「ペン場面」の結果(表2-1)と比較してみると、やはり頼みやすいと思う比率は全体的にやや低いことがわかる。こうした結果を頼みやすいと感じる順に並べると、以下ようになる。

K(親): 「友達(97.4)」 > 「先輩(89.9)」 ≥ 「後輩(88.7)」 ≫ 「先生(59.4)」

J(親): 「友達(94.0)」 ≫ 「後輩(75.2)」 > 「先輩(71.7)」 ≫ 「先生(54.2)」

このように「親・友達」と「親・先生」に対する比率には両国間の差があまりないが、「親・先輩」と「親・後輩」に対する比率には差が認められる。具体的にみると、相手が「親・先輩」の場合、韓国では89.9%が頼みやすいと思っているのに対して、日本では71.7%にとどまっている。また、「親・後輩」が相手の場合にも「親・先輩」の時とほぼ同じ傾向を見せている。しかし、ここでも「親・先生」に対する比率は注目される。つまり、親しくても自分のジュースを買うために先生にお金を借りる行為には、約5割の人が負担を感じていることがわかる。

表3-2 親しくない相手に対して小銭を借りる場合の負担度

単位: % (人

数)

負担度	疎-先生		疎-先輩		疎-友達		疎-後輩		初-学生	
	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
頼みにくい	38.4	64.5	14.1	52.0	10.9	40.3	15.5	47.7	56.8	87.4
やや頼みにくい	38.4	24.8	42.5	35.8	33.9	39.1	42.6	37.9	29.5	9.1
小計	76.8	89.3	56.6	87.3	44.8	79.4	58.1	85.6	86.3	96.5
やや頼みやすい	14.9	6.9	30.0	8.6	35.2	16.8	28.5	10.6	7.6	2.6
頼みやすい	8.3	3.8	13.4	4.1	20.0	3.8	13.4	3.8	6.1	0.9
小計	23.2	10.7	43.4	12.7	55.2	20.6	41.9	14.4	13.7	3.5
合計	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)

一方、親しくない相手に依頼する場合は「ペン場面」と類似した傾向が見られる。表3-2をみると、親しくない相手に対して小銭を借りる場合、日本では「頼みにくい」と思う比率のほうが高く、韓国では「頼みやすい」と思う比率が高いといった結果となり、両国間に画然とした違いがあることがわかる。以下、頼みやすい相手順に並べると、次のようになる。

K(疎): 「友達(55.2)」 > 「先輩(43.4)」 > 「後輩(41.9)」 ≫ 「先生(23.2)」 > 「初・学生(13.7)」

J(疎): 「友達(20.6)」 > 「後輩(14.4)」 > 「先輩(12.7)」 > 「先生(10.7)」 > 「初・学生(3.5)」

これをみると、韓国では、親しくない友達、先輩、後輩であっても、約4～5割の人は50ウォン程度の小銭を借りるのにあまり負担を感じないようである。同じ人物に対する割合が1～2割を占める日本の結果とは対照的である。また、親しくない先生に対する依頼において、韓国では23.2%の人が、日本では10.7%がそれぞれ頼みやすいと意識していることが確認された。日本に比べ、先生にはボールペンを借りることさえ負担を感じる傾向の強い韓国の状況を考えると、「小銭場面」での23.2%という数値は決して低いとはいえないと思われる。さらに、日本では見知らぬ学生に対して頼みやすいと思う人が3.5%でほとんどいないが、韓国では13.7%もの人が頼みやすいと回答している。

何より、今回の結果から、金銭的な依頼となると、日本人は「親・友達」を除くすべての相手に対して韓国人より負担を感じていることがわかった。両国間でミス・コミュニケーションが起り得る可能性の高い場面といえよう。

(3) デジタルカメラを借りる場面

最後に、発表の準備のためにデジタルカメラを借りる場合はどうかについて見てみよう。表4-1は、依頼相手が親しい人の場合の結果を示したものである。

表4-1 親しい相手に対してデジカメを借りる場合の負担度 単位：%
(人数)

依頼相手 負担度	親・先生		親・先輩		親・友達		親・後輩	
	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
頼みにくい	17.9	7.2	5.6	5.6	1.7	1.2	5.9	5.9
やや頼みにくい	38.9	23.8	24.7	23.5	7.1	4.4	18.1	15.5
小計	56.8	31.0	30.3	29.1	8.8	5.6	24.0	21.4
やや頼みやすい	27.3	30.2	39.1	34.7	20.5	16.3	32.3	29.4
頼みやすい	16.0	38.8	30.7	36.2	70.7	78.1	43.8	49.2
小計	43.3	69.0	69.8	70.9	91.2	94.4	76.1	78.6
合計	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)

表4-1をみると、「親・先生」を除いて、親しい先輩、友達、後輩に対する結果は日韓で大きな違いがなく、わずかではあるが、頼みやすいと感じる比率が韓国人より日本人のほうが高いことがわかる。この軽微な違いを「あまり違いがない」と結論づけるためには、デジタルカメラというモノが日韓で同一価値を持たなければならないと言える。例えば、仮に韓国で、デジタルカメラがあまりにも貴重で高価のモノとして扱われ、よほどの場合でない人に貸すモノではないという社会状況だとすれば、上記のように数値上の軽微な違いであっても、非常に大きい意味を持つことになると思われる。

外国との対照研究において特に注意すべき点であろう。しかし、日韓両国間でデジタルカメラに対する価値にあまり違いはないと考えられ、ここでは数値に現れたとおりの相違をそのまま受け止めることとする。ここでも、表に示された結果を頼みやすい相手順に並べると、以下ようになる。

K(親): 「友達(91.2)」≫「後輩(76.1)」>「先輩(69.8)」≫「先生(43.3)」

J(親): 「友達(94.4)」≫「後輩(78.6)」>「先輩(70.9)」≥「先生(69.0)」

具体的にみると、両国共に9割を超える人が「親・友達」には頼みやすいとっていて、最も高い。次いで、「親・後輩」には7割強、「親・先輩」には7割前後の人が頼みやすいと答えている。ただし、相手が先生となると、親しい関係にもかかわらず、韓国では頼みやすいと思う人の割合が43.3%とかなり低くなるのに対し、日本では「親・先輩」とほぼ同じ程度の高い割合を占めていて、両国間での相違が認められる。やはり、韓国では先生に頼むことに相當の抵抗を感じていることが明らかである。

次に、親しくない相手にはどうかについてみよう。表4-2をみるとわかるように、全

表4-2 親しくない相手に対してデジカメを借りる場合の負担度

単位: % (人数)

依頼相手 負担度	疎・先生		疎・先輩		疎・友達		疎・後輩		初・学生	
	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
頼みにくい	62.6	53.7	39.6	59.6	28.3	39.1	34.3	47.8	80.7	90.0
やや頼みにくい	29.9	32.3	46.2	33.6	48.3	47.4	46.3	39.4	14.2	7.1
小計	92.5	86.0	85.8	93.2	76.6	86.5	80.6	87.2	94.9	97.1
やや頼みやすい	6.1	9.8	10.9	6.0	18.2	11.3	15.3	10.6	2.8	2.6
頼みやすい	1.4	4.2	3.3	0.8	5.2	2.3	4.2	2.3	2.3	0.3
小計	7.5	14.0	14.2	6.8	23.4	13.6	19.5	12.9	5.1	2.9
合計	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)	100(57 6)	100(66 3)

体的に頼みにくいと感ずる割合が非常に高く、両国共に親しくない人にデジタルカメラを借りることが、依頼主にとっていかに負担度の高い行為なのかがうかがえる。また、全体的に日本のほうが韓国より頼みにくいと感ずる割合がわずかながら高くなっていることがわかる。さらに、相手が先生の場合には、ペン場面や小銭場面でも見られたように日本に比べ、韓国のほうが頼みにくいと思う割合が高いことが明らかである。この結果を頼みやすい相手順に並べると、以下ようになる。

K(疎): 「友達(23.4)」>「後輩(19.5)」>「先輩(14.2)」>「先生(7.5)」>「初・学生(5.1)」

J(疎): 「先生(14.0)」≥「友達(13.6)」≥「後輩(12.9)」>「先輩(6.8)」>「初・学生(2.9)」

これをみると、日本人が親しくない同級生の友達や後輩、先輩よりも先生のほうが頼みやすいと感じる人の比率が高い。一方、韓国人は親しくない先生に対し頼みやすいと感じる人が日本の半数程度であり、頼みやすい順が両国で明らかに異なっていた。これは、たいへん興味深い結果であるといえよう。

以上では、「ペン場面」「小銭場面」「デジカメ場面」の3つの依頼場面から依頼主が各々の依頼相手に対して感じる心理的負担についてみた。

4.2 依頼行動の実行についての日韓比較

次は、回答者が実際にそれぞれの依頼場面に置かれた場合、「親しい相手」および「親しくない相手」に対して依頼を実行するか否かについてみていきたい。以下の表5-1と表5-2は、それぞれの依頼相手に対して実際に「頼む」と回答した比率（以下、依頼の実行率）を場面別に示したものである。これらの表には、依頼の実行率に加え、上記の負担度の調査で得られたデータのうち「やや頼みやすい」と「頼みやすい」と回答した割合を合わせたもの（以下、頼みやすさ）も示し、これらを比較しながら分析を進めていく。もちろん、依頼の内容や相手に感じる心理的負担は、実際に頼むか頼まないかといった依頼行動の実行と必ずしも比例するとは限らないが、頼みにくいと思っても実際は頼むことがあり、頼みやすいと思っても頼まない場合もあると思われる。そのため、以下ではこうした依頼主の行動パターンに注目し、日韓両国の依頼行動の実態を追求していく。ここでは、まず日韓の依頼の実行率について検討してから、次に実行率と頼みやすさとの関係について述べたいと思う。

表5-1 頼みやすさと依頼の実行率（親しい相手の場合）

単位：%

場面	依頼相手	親・先生		親・先輩		親・友達		親・後輩	
		韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
		ペン	頼みやすく思う	78.6	91.5	95.8	92.3	99.7	99.2
実際に頼む	84.2		93.7	97.0	95.5	99.1	99.5	95.6	95.3
小銭	頼みやすく思う	59.4	54.2	89.9	71.7	97.4	94.0	88.7	75.2
	実際に頼む	54.7	44.6	89.2	67.7	95.8	90.2	85.1	69.5
デジカメ	頼みやすく思う	43.3	69.0	69.8	70.9	91.2	94.4	76.1	78.6
	実際に頼む	53.1	74.2	80.6	77.7	94.6	96.5	78.5	78.9

では、親しい相手に対して実際に頼むかどうかについて見てみよう。表5-1では、親しい相手に対する実行率が場面ごとに見ることができる。まず、全体の傾向を見ると、

どの場面においても両国共に親しい友達に対する実行率が最も高く、次いで先輩、後輩の割合が高くなっている。「親・友達」に対しては、両国共にどの依頼場面においても、「頼む」と回答した比率が99%以上で非常に高く、日韓の差はほとんど認められない。次に、親しい先輩や後輩に対しては「ペン場面」と「デジカメ場面」において日韓の差はほとんど見られないが、「小銭場面」では、日本よりも韓国のほうが「頼む」と回答した比率が高くなっている。最後に「親・先生」の結果をみると、どの場面においても日韓共に実行率は最も低いが、「ペン場面」と「デジカメ場面」では日本のほうが韓国よりも実行率が高いが、「小銭場面」では韓国のほうが高いことがわかる。

こうした依頼実行の行動に関する結果を心理的負担度の結果と比較してみると、日本の「親・先生」の場合を除いて、全体的に若干の差はあるものの、それほど大きな変化はないといえる。しかし、「親・先生」の場合をみると、「ペン場面」と「デジカメ場面」では、頼みやすいと思う割合よりも実際に頼む割合がやや高くなっている。一方、「小銭場面」では、頼みやすいと思う比率が実行率を上回っていて、韓国より日本のほうがその差が若干大きい。これらの状況から総合的に判断すると、親しい相手に依頼をする際には、どの場面においてもほとんどの場合、相手に感じる伝えやすさが実際の行動にそのまま反映され、依頼が行われることがわかる。

一方、親しくない相手に対して実際に実行するかどうかについて見てみよう。表5-2からわかるように、依頼相手が「デジカメ場面」の「疎・先生」の場合を除いては、場面や相手にかかわらず、日本人より韓国人のほうが実際に「頼む」と回答した比率が非常に高くなっている。特に「小銭場面」では、両国間に20~30%近くの差がついていて、日韓の違いが際立っている。これより、日本人はたとえ10円でも親しくない相手には借りるという行動をとることがほとんどないことがわかる。

さらに、依頼の実行率の結果を伝えやすさと比較してみよう。まず「ペン場面」と「デジカメ場面」をみると、日韓共に頼みやすさと実行率には差があり、大変興味深い結果が見られた。例えば、「ペン場面」で相手が「疎・先生」の場合、頼みやすいと回答している比率は、韓国は30.3%、日本は22.8%にしかすぎないが、実際に頼むと答えた割合は韓国が59.5%、日本が49.5%の人で、頼みやすさと実行率には約2倍の差がみ

表5-2 頼みやすさと依頼の実行率（親しくない相手の場合）

単

位：%

依頼相手 場面		疎先生		疎先輩		疎友達		疎後輩		初・学生	
		韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日
ペン	頼みやすく思う	30.3	22.8	41.8	16.3	70.6	39.8	63.0	33.2	27.3	12.2
	実際に頼む	59.5	49.8	72.2	47.1	88.0	75.7	81.0	63.1	71.9	46.3
小銭	頼みやすく思う	23.2	10.7	43.4	12.7	55.2	20.6	41.9	14.4	13.7	3.5
	実際に頼む	27.6	9.0	48.5	12.2	59.4	20.4	45.9	16.0	19.3	2.7
デジカ	頼みやすく思	7.5	14.0	14.2	6.8	23.4	13.6	19.5	12.9	5.1	2.9

メ	う										
	実際に頼む	14.6	25.5	21.7	11.6	31.0	24.1	25.0	18.1	6.8	3.8

られる。また、依頼相手が「疎・先輩」「疎・友達」「疎・後輩」「初・学生」の場合も同じような傾向が見られる。こうした結果から、ボールペンのように相手にかかる負担の軽い依頼であれば、親しくない相手に対し頼みにくいと感じていても、依頼を実行する比率がかなり高いことが分かる。「デジカメ場面」は「ペン場面」に比べ実行率が低いものの、どちらの場面もほぼ類似した傾向があると言える。

次に「小銭場面」の状況を見ると、全体的には頼みやすさと実際に依頼するかどうかの意識はほぼ一致しているといえる。しかし、若干の違いも指摘できる。韓国では「ペン場面」と「デジカメ場面」と同様に、わずかながら実行率が頼みやすさを上回っている。一方、日本では、「小銭場面」の場合、頼みやすさと実行率の間にほとんど差はないが、韓国とは対照的に頼みやすさが実行率をわずかに上回っている。

以上のように、それぞれの場面で依頼相手に対して実際に頼むかどうかという依頼主の意識について日韓の違いをみてきたが、親しい相手に対しては、両国共に頼みやすさが実際の行動にそのまま反映されていることが明らかとなった。また、親しくない相手に対しては、「ペン場面」と「デジカメ場面」で頼みにくいと感じていても、実際に頼むことが多かったが、「小銭場面」では頼みやすさと実際の行動はほぼ一致していた。このような場面による違いは、依頼内容に内包された必要性や緊急性などを包括する「依頼の妥当性」の問題が深く関わっている可能性もあるといえる⁷⁾。

5. まとめと今後の課題

以上では、依頼内容および依頼相手の親疎関係に注目しつつ、依頼行動を起こす前の依頼主の意識について日韓の異同を分析した。主な結果をまとめると、次のようになる。

- (1) 依頼相手が親しい関係である場合、「ペン場面」および「デジカメ場面」では、依頼相手ごとに若干の差は認められるものの、親しい先生を除いて心理的負担度、依頼の実行に関する両国間の違いはほとんど見られなかった。また、「小銭場面」では日本より韓国のほうが親しい先生を除くすべての相手に対して頼みやすいと感じていて、実際の行動も負担度とほぼ比例する傾向があっ

7) 頼みやすさと実行率との関係について依頼の妥当性の視点から客観的に検討するためには、今回のボールペン、デジタルカメラ、小銭のようにそれぞれ価値の異なるモノの比較ではなく、同じモノで依頼内容が異なる状況場面での比較が必要とされよう。この点については、今後の課題とする。

た。

- (2) 依頼相手が親しくない関係である場合、「ペン場面」「小銭場面」「デジカメ場面」のすべての場面において日本より韓国の方が頼みやすさを感じる割合も実行率も高いことがわかった。特に「小銭場面」での両国間の差は顕著であり、実際の接触場面においてトラブルの原因になることも十分予想される。

以上のように、依頼行動を起こす前の依頼主の意識について日韓で比較すると、両国間にはっきりとした違いがあることが明らかになった。これは依頼内容そのものに対する日韓両国の認識、依頼相手に対する認識のギャップに因るものであると思われる。こうした認識のギャップを相互に理解することは、今後、両国民が円滑なコミュニケーションを行う上で、何より重要であろう。

今後は、以上の依頼行動における依頼主の意識について依頼内容の妥当性の問題と関連づけて検討していきたい。また、今回の結果を生かして、地域差や男女差なども視野に入れながら、依頼する際の表現やストラテジーなどの日韓の特徴についても探っていきたい。

【参考文献】

- 猪崎保子 (2000) 「「依頼」会話にみられる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ—日本人とフランス人日本語学習者の接触場面の研究」『日本語教育』104号 pp.79-88
- 岡本真一郎 (1988) 「依頼表現の使い分けの規定要因」『愛知学院大学文学部紀要』18 pp.7-14
- 生越まり子 (1995) 「依頼表現の対照研究—朝鮮語の依頼表現」『日本語学』14-11 pp.79-88
- 尾崎喜光 (2005) 「依頼行動と感謝行動の日韓比較」『日韓新時代における若者の国際コミュニケーションのあり方と意識に関する研究』第I部 論文編 科学研究費研究成果報告書
- 敵廷美 (1997) 「日本と韓国の大学生の依頼の場面でのHedge表現使用における男女差の比較—主に丁寧さ(Politeness)の観点から」『ことば』18 現代日本語研究会 pp.27-40
- 敵廷美 (1999) 「日本語と韓国語の依頼の構造とストラテジー-moveの観点から」『言語情報科学研究』4 東京大学言語情報科学研究会 pp.47-68
- 敵廷美 (2001) 「日本語と韓国語の言いわけ表現の対照研究—依頼談話の場合」『言語文化研究』20-2 松山大学学術研究会 pp.283-299
- 敵廷美 (2004) 「日本語と朝鮮語における依頼の仕方の対照研究—発話行為の観点から」『言語と文化』第7号 関西学院大学 言語教育研究センター pp.1-11
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に」『日本語教育』79 日本語教育学会 pp.53-63
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1993) 「依頼表現方略の分析と記述—待遇表現教育への応用に向けて」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5 pp.52-69
- 川成美香 (1993) 「日本の女性語 依頼表現」『日本語学』12-6 pp.125-134

- 河村光雅 (1999) 「日朝両言語における依頼表現の違い」『日本語・日本文化』25 大阪外国語大学研究留学生別科 pp.47-61
- 木村英樹 (1987) 「依頼表現の日中対照」『日本語学』6-10 明治書院 pp.58-66
- 鮫島重喜 (1998) 「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程—中国語話「依頼」「断り」「謝罪」の場合」『日本語教育』98 pp.73-84
- 謝オン (2001) 「談話レベルからみた「依頼発話」の切り出し方—日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から」『東京外国語大学日本研究教育年報』5 pp.77-101
- 田中優子 (2004) 「依頼表現の日独対照—ペンを借りる場合」『計量国語学』24 計量国語学会 pp.198-213
- 村上京子 (1991) 「フローチャートによる要求表現の分析」『日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」予稿集』津田日本語教育センター pp.25-34
- 中崎温子 (1998) 「依頼表現にみる日英対照分析—ポライトネスの観点から—」『英語表現研究』日本英語表現学会 pp.39-47
- 盧姓鉉 (2005) 「相手の所持品を使用する場面での日韓言語行動の切り出し方—話し相手に感じる「頼みやすさ」に注目して—」『第16回社会言語科学学会大会予稿集』 pp.46-49
- 林明子 (2000) 「会話展開の構造と修復のストラテジー—日独語対照の視点からみた「依頼」と「断り」におけるインタラクション」『東京学芸大学紀要第2部門人文科学』51 pp.81-94
- 藤島麗 (1993) 「敬語の日英対照研究—依頼表現と丁寧さ」『東京女子大学言語文化研究』2号 pp.34-46
- 牟恩英 (2001) 「日韓の依頼表現」『国文学試論』15 大正大学大学院文学研究科 pp.1-8
- 柳慧政 (2001) 「日本語話者と韓国人日本語学習者の依頼行動の比較研究—ポライトネスストラテジーの観点から—」『学芸日本語教育』第3号 pp.32-43
- 柳慧政 (2004) 「依頼談話の日韓比較研究—依頼のための情報提供の現れ方を中心に—」『日本学報』第58輯 韓国日本学会 pp.163-173
- 林淑珠 (1982) 「日本語と中国語の命令・依頼表現の比較—丁寧度の観点から—」『国語学研究』22 東北大学文学部 pp.1-13

＜ 要 旨 ＞

韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究

- 依頼行動における依頼主の意識に注目して -

本稿は、依頼内容および依頼相手の親疎関係に注目しつつ、依頼行動を起こす前の依頼主の意識について異文化間コミュニケーションの観点から日韓両国における依頼行動の特徴について検討したものである。主な結果をまとめると、次のようになる。

(1) 依頼相手が親しい関係の場合：「ペン場面」および「デジカメ場面」では、依頼相手ごとに若干の差は認められるものの、親しい先生を除いて心理的負担度、依頼の実行に関する両国間の違いはほとんど見られなかった。また、「小銭場面」では日本より韓国の方が親しい先生を除くすべての相手に対して頼みやすいと感じていて、実際の行動も負担度とほぼ比例する傾向があった。

(2) 依頼相手が親しくない関係の場合：「ペン場面」「小銭場面」「デジカメ場面」のすべての場面において日本より韓国の方が頼みやすさを感じる割合も実行率も高いことがわかった。特に「小銭場面」での両国間の差は顕著であり、実際の接触場面においてトラブルの原因になることも十分予想される。

以上のように、依頼行動を起こす前の依頼主の意識について日韓で比較すると、両国間にはっきりとした違いがあることが明らかになった。これは依頼内容そのものに対する日韓両国の認識、依頼相手に対する認識のギャップに因るものであると思われる。こうした認識のギャップを相互に理解することは、今後、両国民が円滑なコミュニケーションを行う上で、何より重要であろう。

▣ 강석우(姜錫祐)

가톨릭대학교 일어일본문화전공 부교수
(420-743) 경기도 부천시 원미구 역곡2동 산43-1
02-2164-4462
kangsw@catholic.ac.kr

- 투 고 일: 2007년 5월 30일
- 심사개시: 2007년 6월 10일
- 심사완료: 2007년 8월 5일